

# 文化の病いと〈人間〉獣

——ニーチェ，フロイト，カフカ

山 尾 涼

(受付 2018年10月31日)

## 1. はじめに

ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844–1900)，フロイト (Sigmund Freud 1856–1939)，カフカ (Franz Kafka 1883–1924) はそれぞれ哲学者，精神分析医，作家というように，職業こそ異なるが，19世紀後半から20世紀の幕開けにかけて生きたという時代的な共通性がある。20世紀前半の歴史を概観すると，1914年に第一次世界大戦，1939年には第二次世界大戦，また，およそ600万人が犠牲になったといわれるショアーという，人類による人類の合理的な大虐殺という蛮行が行われた時代である。

ニーチェはちょうど20世紀の始まりに没しているが，ニーチェ，フロイト，カフカの三者は世界大戦というカタストロフィの予感を胸に，避けがたく自己破壊への欲望へ向かっていく西洋の文化と人類をいかにみつめたのだろうか。また，彼らはその洞察を，それぞれが哲学，精神分析，執筆という独自のやり方でどのように描出したのか。当時の西洋がどのような文化的な病いを抱えていたのか，あるいは病的な文化の中で，人間はいかにして容赦のない殺戮に至るまでの獣性，すなわちニーチェの言葉を借りればタイトルに挙げたような〈人間〉獣を育んだのか，文化と人間にまつわる三者の言説を集めながら分析を行い，時代と人間に関する彼らの洞察の共通性を明らかにする。

## 2. 先行研究

はじめにニーチェとフロイトについての関係性を確認する。フロイトが最初の論文『ヒステリー研究』(*Studien über Hysterie*) をブロイアーと共著で刊行したのが1895年であることを鑑みると，晩年に精神を患っていたニーチェがフロイトの著作を手にしたとは考えにくい。一方フロイトは，『夢判断』(*Die Traumdeutung* 1900) やそのほかの論文でニーチェの名を挙げており，『ツァラトゥストラはかく語りき』(*Also sprach Zarathustra* 1885) などを読んでい

---

本研究はJSPS 科研費JP16K21543の助成を受けたものである。なお，本論文中の日本語訳はすべて拙訳による。

たことは明らかである。

興味深いのは、フロイトが、自身の精神分析によって導き出した人間の心的構造に関する洞察と、ニーチェの哲学との間に一致を自覚していた点である。2014年に出版された Ries の論文によると、以下のように指摘されている。「“Es” や夢、無意識といったものは、ニーチェによって“すでに論じられて”おり、フロイトは1925年の『自伝』の中でニーチェについて、『彼の予感と洞察は、精神分析が苦勞して得た結果と驚くほどよく合致している』と告白している。——さらにフロイトは、ニーチェを読むことをながきに亘って避けてきたのは、外部からの影響を免れるためだったと付け加えている。」(Das „Es“, der Traum, das Unbewusste [...] sind bei Nietzsche in einer Weise „vorthematisiert“, dass Freud in seiner *Selbstdarstellung* (1925) von ihm bekennt, dass „dessen Ahnungen und Einsichten sich oft in der erstaunlichsten Weise mit den mühsamen Ergebnissen der Psychoanalyse decken“, und —fügt er hinzu— der Grund gewesen sei, warum er es sehr lange vermieden habe Nietzsche zu lesen, um sich von äußeren Einflüssen freizuhalten.)<sup>1</sup>

ここではさらに、Es という用語そのものが、フロイト独自の概念なのではなく、同時代のドイツ系医師グロデック (Georg Groddeck 1866–1934) が1923年に初めて用いた用語であること、そしてグロデック自身もニーチェの哲学から着想を得て、Es という言葉を使い始めたことが明示されている。この点に関してフロイト自身の言及を探すと、1923年に発表した『自我とエス』(*Das Ich und das Es*) の註に以下のように記されている。「グロデック自身、おそらくニーチェの例に従っている。ニーチェにおいては非人称的なもの、すなわちわれわれの本質に宿る自然必然的なものに対しては、[エスという] 文法的な表現が徹頭徹尾、用いられる。」(G r o d d e c k selbst ist wohl dem Beispiel N i e t z s c h e s gefolgt, bei dem dieser grammatikalische Ausdruck [= Es] für das Unpersönliche und sozusagen Naturnotwendige in unserem Wesen durchaus gebräuchlich ist.)<sup>2</sup> 以上のことから、フロイトをはじめとして、当時の精神医学の領域が、ニーチェ哲学の影響下に少なからずあったといえるのではないだろうか。

次に、ニーチェによるカフカへの影響に関して概観する。この点に関しては、すでに多くの研究によって論及されてきた。たとえば2008年に出版された *Kafka-Handbuch* によると、カフカは学生時代からニーチェに興味を持っていたこと、そして、「後にカフカは『ツァラトゥストラはかく語りき』を所有し、『音楽の精神からの悲劇の誕生』を高く評価していた」(Später besitzt Kafka *Also sprach Zarathustra*, schätzt *Die Geburt der Tragödie aus dem Geist*

1 Ries, Wiebrecht: *Schule des Verdachts. Zur Grundlegung der Moderne bei Nietzsche –Freud – Kafka*. Berlin (LIT) 2014, S. 127.

2 Freud, Sigmund: *Das Ich und das Es*, in: *Gesammelte Werke in 17 Bänden*. Hrsg. von Anna Freud. 3. Aufl. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1999, 13. Band. [1. Aufl. :1940], S. 251.

der Musik.)<sup>3</sup>とある。*Kafka Chronik* では、1900年の夏に両親と赴いた避暑地で、Selma Kohnに『ツァラトゥストラはかく語りき』を朗読したこと、また、生涯の親友となるブロート(Max Brod 1884-1968)との出会いが、1902年の「ショーペンハウアーとニーチェ」と題された講演に二人が偶然に参加したことがきっかけであることなどが記載されている<sup>4</sup>。

さらにHandbuchを参照すると、両者の関係についてはすでにSokel, Fingerhut, Pasley, Anders, Riesといった主要なカフカ研究者によってそれぞれの観点から論じられていることがわかる。たとえばSokelは両者の破滅に至る経緯と充足感の結びつき、Fingerhutは苦行者としての生き方像の関係性、Andersは神なき世界観の共通点というように、ニーチェとカフカは様々な視点から論じられてきた<sup>5</sup>。そのほかには2008年にNeumannは、ニーチェとカフカとの関係性を扱った論文集*Für Alle und Keinen*にて、論文*Der Affe als Ethnologe*を発表した。ここではダーウィン(Charles Robert Darwin 1809-1882)の進化論が、ニーチェの人間像に与えた影響に関する分析がなされたのちに、その影響がカフカの物語では、人間と動物との境界線の揺らぎ、もしくは両者のハイブリッドという表象において、どのように描かれているのかについて論じられている<sup>6</sup>。ダーウィン以降の近代における人間観の変遷を探ろうとする意図は、本論文の関心に類するが、Neumannの研究にはニーチェに関する言及が若干乏しい点と、カフカの短編小説『あるアカデミーへの報告』(*Ein Bericht für eine Akademie* 1912)に絞った解釈であるという点から、これを踏まえて本論ではカフカの別の作品を用いて分析していく。

フロイトとカフカの関係についても、ニーチェとの関係と同じく、多数の研究によって指摘されている。カフカがフロイトの、どの論文を読んでいたのかについてはいまだ明らかとはなっていないが、『判決』(*Das Urteil* 1912)や『変身』(*Die Verwandlung* 1912)を執筆した当時、カフカはフロイトを念頭において執筆したと日記に記している<sup>7</sup>。そこから、彼がフロイトの理論を何らかの方法で知っていたこと、また、少なくとも1912年の時点ではフロイト理論を執筆へ多少なりとも応用したことは否定しがたい<sup>8</sup>。

3 Schmitz-Emans, Monika: *Kafka und die Weltliteratur*, in: *Kafka-Handbuch. Leben - Werk - Wirkung*, Hrsg. von Bettina von Jagow und Oliver Jahraus. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 2008, S. 273-292, „Schon als Schüler liest Kafka Schriften Friedrich Nietzsches [...]“, hier S. 287.

4 Bezzel, Chris: *Kafka Chronik*. München-Wien (Cahls Hanser) 1975. Vgl., S. 18, 22.

5 Schmitz-Emans: *Kafka und Weltliteratur*, Vgl., S. 287.

6 Neumann, Gerhard: *Der Affe als Ethnologe. Kafkas Bericht über den Ursprung der Kultur und dessen kulturhistorischer Hintergrund*, in: *Für alle und Keinen. Lektüre, Schrift und Leben bei Nietzsche und Kafka*. Hrsg. von Friedrich Balke, Joseph Vogl und Benno Wagner. Zürich-Berlin (diaphanes) 2008, S. 79-97.

7 Vgl., Kafka, Franz: *Tagebücher*. Hrsg. von Hans Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Paysley. Frankfurt am Main (Fischer) 2002, S. 461.

8 フロイトの精神分析の理論および心的装置の解釈と、カフカの執筆との関係性については拙著にてふれている。山尾 涼：『カフカの動物物語——〈檻〉に囚われた生』、水声社、2015年、27-29頁参照。

これまでの先行研究では、フロイトとカフカの洞察の共通性を探るというよりも、フロイト理論を手掛かりに作品を解釈するという手法が多く用いられてきた。代表的な研究を挙げると、古くは1983年に他罰的な権力像に超自我の概念を敷衍した Sokel、近年では2008年と2012年にフロイトの文明批判やフェティシズム理論を解釈に取り入れた Neumann の研究がある<sup>9</sup>。

このようにニーチェ、フロイト、カフカは同時代に生きた人物というだけではなく、ニーチェからフロイト、ニーチェとフロイトからカフカへ、という影響の図式が確認される。しかし、先に記した先行研究を俯瞰すると、三者の中の二者を繋げる研究は多いものの、この三者をひとつの線へと繋ぎ、当時の文化と人間に対する彼らの洞察が、いかなる点で共通しているのかについて分析する試みは、いまだ十分になされていないといえる。先に引用した Ries の2014年の論文が、ニーチェ、フロイト、カフカの時代的な共通性と影響関係に着目した実証的研究に挙げられるが、三者の共通項を総括するよりも、伝記的な個々の概説に重きがおかれており、本論文の目指すところとは異なっている。本論文のタイトルでは「文化の病い」と称したが、20世紀における西洋文化の病理とは、いかに読み解きうるのか。まずはニーチェ、フロイト、カフカの系譜を汲んで、20世紀の文化的な表象を分析した思想家アドルノ (Theodor W. Adorno 1904–1969) の言葉を手掛かりとする。

### 3. ニーチェ —— 文明化と退化

人間の社会生活の秩序と繁栄の基盤となるはずの文化そのものが、近代以降に一種病的ともいえる傾向を強めていったこと、また、その文化の病的状態を意識することなく、文化的生活を享受する人間がいかなる状態に陥っているのかについてはアドルノが、ハクスリー (Aldous Leonard Huxley 1894–1963) の小説『素晴らしい新世界』 (*Brave New World* 1932) から引用した人物の台詞が最も端的に表している。アドルノの引用のまま、台詞を引用する。「人間は全面的文明化によって退化させられる、と彼は答える。『どんな立場から、人間が退化させられるというのだね？よく消費して、よく働く市民としてなら、人間は完璧だ。むしろ、君がわたしたちとは違う基準を選ぶというのなら、人間は退化させられているといえるだろう。[…]]」 ([...] es werde der Mensch durch die totale Zivilisation degradiert, antwortet

9 Sokel, Walter H.: *Franz Kafka. Tragik und Ironie. Zur Struktur seiner Kunst*. Frankfurt am Main (Fischer) 1983.

Neumann: *Fetisch und Narrativität. Kafkas Bildungsroman Der Verschollene*, in: *Sigmund Freud und das Wissen der Literatur*. Hrsg. von Peter-André Alt und Thomas Anz. Berlin-New York (Walter de Gruyter) 2008, S. 121–136.

Neumann: *Ein Bericht für eine Akademie. Kafkas Theorie vom Ursprung der Kultur*, in: *Franz Kafka - Experte der Macht*. München (Carl Hanser) 2012, S. 171–194.

er: »Degrade him from what position? As a happy, hard-working, goods-consuming citizen he's perfect. Of course, if you choose some other standard than ours, then perhaps you might say he was degraded. [...]«<sup>10</sup>

「人間は全面的文明化によって退化させられる」との文言は、アドルノの社会批判的な文脈からすると、資本主義における個人の均質化や、合理的に資本を生み出す労働単位として、人間がモノへと物象化される事態を<退化>と称していると理解される。アドルノは代替不可能な個性を現代の人間の各人の中に措定したのち、その個々人の取り換え不可能性が、過剰な資本主義システムの中では喪失されていくと指摘する。そのさまを、無個性なるものへの先祖返りになぞらえて、アドルノは退化と言いつつ。極端な資本主義システムを、利益や効率の点から捉えて、進化の一形式とみなすならば、その進歩的な構造の中で家畜的、モノ的に退化していく個人というイメージの対比からは、文明の進歩が時に、いかに人間を疎外しうるかという洞察がみてとれる。

進歩していく文明に対して、その中で退化していく文化と人間という表象とは、アドルノよりも前の晩年のニーチェ、フロイト、そしてカフカの著作の中へ遡っていくことができる。さらに付け加えると、文化的な進歩に対する懐疑や疑念はアドルノよりもニーチェの方がはるかに強いということすら可能である。ニーチェが1880年代に書き残した遺稿集の断片を引用する。

進歩——間違えてはならない！時間は前に進む——われわれは、時の流れに存在するものはすべて、そのように前へ進むと信じたがる。発展とは前へ向かう発展であると。これは、最も思慮深い者も惑わされる見掛け倒しである。19世紀は、16世紀に比して、進歩していない。そして1888年のドイツ精神は、1788年のドイツ精神に比して退歩している。»人類«は前進しておらず、人類はかつて存在すらしていない。[...] 人間は動物と比して進歩していない。文化に甘やかされたものは、アラビア人やコルシカの人々と比べると奇形である。(Fortschritt. – Daß wir uns nicht täuschen! Die Zeit läuft vorwärts – wir möchten glauben, daß auch alles, was in ihr ist, vorwärts läuft, – daß die Entwicklung eine Vorwärts/Entwicklung ist... Das ist der Augenschein, von dem die Besonnensten verführt werden. Aber das neunzehnte Jahrhundert ist kein Fortschritt gegen das sechzehnte: und der deutsche Geist von 1888 ist ein Rückschritt gegen den deutschen Geist von 1788... Die »Menschheit« avanciert nicht, sie existiert nicht einmal. [...] Der

10 Adorno, Theodor W.: *Aldous Huxley und die Utopie*, in: *Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Kulturkritik und Gesellschaft I Prismen/Ohne Leitbild*. Hrsg. von Rolf Tiedemann. 1. Aufl. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1977, 10/1 Band, S. 115.

Mensch ist kein Fortschritt gegen das Tier: der Kultur/Zärtling ist eine Mißgeburt im Vergleich zum Araber und Korsen; [...]」<sup>11</sup>

時の経過に比例して、文化はより洗練された形へと発展していき、さらには人類全体も、よりよい社会的善の方向へと進歩していくはずだという楽観主義を、ニーチェはこの一文をもって打ち砕く。引用中にあるニーチェの、「人類はかつて存在すらしていない」、「人間は動物と比して進歩していない」という二つの言葉の背景には、1859年に『種の起源』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*) が出版されて以降、西洋に衝撃を与えつつ広まった進化論に対するニーチェ独自の受容のスタンスが読み取れる。つまり、進化論を曲解して、白色人種と西洋文化の優位性を強引な手法でもって主張しようとする一部のイデオロギーや人種主義に対するニーチェの反論を読み取ることができるのではないだろうか。

ダーウィンは人間の進化の過程について明言を避けて、キリスト教をあえて刺激しようとしなかったことは周知である。また、適者生存の概念も、イギリスの社会学者スペンサー(Herbert Spencer 1820–1903) の社会進化論によるものである。しかし、ダーウィンを端を発して、その後ドイツではヘッケルらを経て広まる進化論が、結果的には、神による創造を前提とした世界では自明であった万物の定常性や、人間を他の生き物の最上位に据える人間中心主義の世界観、ひいてはキリスト教徒の白色人種が抱いていた生得的な優越感を根底から揺るがす結果となった<sup>12</sup>。この衝撃を受けて、19世紀後半の西洋は、神に保証されたアイデンティティを手放さざるを得なくなり、人間像の再考を余儀なくされる。そしてついに、二つの考え方が生まれたとはいえないか。

ひとつは、19世紀半ばから隆盛する科学技術を利用して、一度は破壊された西洋の優位性を遺伝学的に、時には偏見に満ちた根拠にしたがって証明しようとするやり方である。これはいわば、生得的な優越感という幻想を手放すことができず、適者生存、自然淘汰の概念を無茶な自己回復の手段として社会転用しようとする試みである。ダーウィン以前よりも、さらに崇高な自己像を作り上げなければならないという強迫観念にとらわれた結果だといえるだろう。自分たちよりも劣る他者像を故意に想定し、攻撃的になることで、暗に自己防衛しようとする考え方は、やがて民族規模の病いのように広まり、優生学や人種理論、民族的ナショナリズムへと転じていく。

この流れとは反対に、「人類はかつて存在すらしていない」という先に引用したニーチェの

11 Nietzsche, Friedrich: *Aus dem Nachlass der Achtzigerjahre*, in: *Werke in drei Bänden*. Hrsg. von Karl Schlechta. München (Carl Hanser) 1982, 3. Band. [1. Aufl. :1966], S. 828.

12 この点に関しては、以下の文献に詳細が論じられている。Vgl., Mayr, Ernst: *TOWARD A NEW PHILOSOPHY. Observations of an Evolutionist*. Cambridge, Massachusetts and London (Harvard University) 1988, S. 215.

言葉には、特権的な人間像に固執することを断固として拒んだうえで、進化論の衝撃をさらに突き詰めようとする意志が込められている。心地よい言説には耳を貸さず、プラトン以降の哲学及び従来の人間像の徹底的な破壊の中から、欺瞞なき真実の人間の姿を打ち立てようとする彼は、あらゆる生物の支配者たる「人類」という認識そのものが誤りであることを指摘する。西洋の歴史において、文化的基盤であるキリスト教の善をかつて完遂できたことはあるのかという疑い、そしておそらくはないであろうという予感、また、その理由とは、人類の根本にある、克服しがたい攻撃性と嗜虐性にあるのではないかという問いを抱いていることを、ニーチェはこの文言において表明する。

『道徳の系譜』(Zur Genealogie der Moral 1887)の中で、ニーチェはこのように人類を語る。「他人の苦しみを眺めることは気分がいい。他人を苦しませることはさらにずっと気分がいい。これは冷酷な命題である。だが、古く、力のある、人間的な、あまりに人間的な根本命題だ。のみならず、おそらく猿すらもこの命題を無条件に是認するであろう。というのも、猿は奇妙な残酷性の数々を考案することで、その人間性をすでに様々な形で示しており、いってみれば人間性を「演じている」といわれているからである。」(Leiden/sehnt tut wohl, Leiden/machen noch wohler – das ist ein harter Satz, aber ein alter mächtiger menschlich/allzumenschlicher Hauptsatz, den übrigens vielleicht auch schon die Affen unterschreiben würden: denn man erzählt, daß sie im Ausdenken von bizarren Grausamkeiten den Menschen bereits reichlich ankündigen und gleichsam »vorspielen«.)<sup>13</sup>

ここでは猿という具体的な動物と人間を並べて語ることで、進化論的な人間像を支持する色が強まっていると同時に、人間の冷酷さが、いにしえから続く本質であることが強調されている。猿にみられる奇妙な「残酷性」は、実のところそれが動物であるからではなく、人間性を「演じている」(vorspielen)のであり、「残酷性」こそが人間の本質であるとニーチェは洞察する。失墜した優越感を補填する目的で、他者への攻撃欲動を躊躇なく開示するその後の時代と戦争を鑑みると、ニーチェの洞察の正当性と時代の先見性は明らかである。

ニーチェはむしろ、人類の進化という事実そのものを否定しているわけではない。ただし、生の官能にまつわるものの一切の禁止、抑圧、否定を掲げて、良心の疚しさで人間を「畜群」として支配しようとする当時の文化と、それをよしとしてニヒリズムという病いに陥る人々を、「力への意思」からかけ離れているという意味において、人種主義論者がもてはやすく進化した西洋人の像からは遠いことを指摘しているといえる。

ニーチェは『道徳の系譜』において、かつて獣であった人類を、「人間「獣」という独特の言葉で繰り返し表現する。その中の一文を引用する。「わたしがいわんとしているのは、病

13 Nietzsche: *Zur Genealogie der Moral*, in: *Werke in drei Bänden*. Hrsg. von Karl Schlechta. München (Carl Hanser) 1982, 2. Band. [1. Aufl. :1966], S. 808.

的な柔弱化と道德化のことであり、それらがこの「人間」にすべての本能を恥じることを学ばしめた。」([...] - ich meine die krankhafte Verzärtlichung und Vermoralisierung, vermögen das Getier »Mensch« sich schließlich aller seiner Instinkte schämen lernt.)<sup>14</sup>人間に恥と道德を学ばしめることは、文化的な進歩とにいえるはずなのだが、しかし、ニーチェは反対に、それを「病的な柔弱化」であると表現する。また、別の箇所では19世紀の人間について、彼はこのように述べている。「人間は、他のどんな動物よりも一層病的であり、不安定で、変わりやすく、不確定である。このことは疑いえない。——人間とは病んだ動物である。」(Denn der Mensch ist kränker, unsicherer, wechselnder, unfestgestellter als irgendein Tier sonst, daran ist kein Zweifel – es ist *das* kranke Tier: [...].)<sup>15</sup>

ここまでのニーチェの言説をまとめると、以下になるのではないかと。かつて、人類は「人間」に「獣」であり、文化はキリスト教道德を介して彼らを調教し、容易に支配できる群れへ人間を変えようと試み続けた。やがて19世紀になり、進化論が世に出ると、過剰な人間中心主義の姿勢は西洋文化とそこに住まう人間を、進化の最先端に据えようとやっきになるが、依然、人間は冷酷で残酷性を秘めた獣性を脱却していないばかりか、むしろ20世紀へと向かう文化と人類は、その攻撃欲動を外向きに強化することで、かつての「人間」に「獣」へと退行しているといえるのではないかと。

ニーチェの言葉は、文化への批判に満ちている。しかし、彼が過剰に皮肉な発言をしたと受け止めるよりも、ニーチェの言葉がすなわち当時の時代における人間の姿と文化の病いを描出しているとは考えられないか。1887年頃の遺稿の中で、今後の暗い時代への予感と文化の行き着く最終局面について、ニーチェは以下のように述べている。「われわれの全ヨーロッパの文化はすでにながきにわたり、10年また10年と募りゆく緊張という拷問をともしつつ、破局をめざすかのように動いている。不穏かつ暴力的、そして性急に。それはあたかも、終末にたどり着くことを望み、もはや熟考することもなく、熟考することに恐怖を抱く奔流に似ている。」(Unsere ganze europäische Kultur bewegt sich seit langsam schon mit einer Tortur der Spannung, die von Jahrzehnt zu Jahrzehnt wächst, wie auf eine Katastrophe los: unruhig, gewaltsam, überstürzt: einem Strom ähnlich, der ans *Ende* will, der sich nicht mehr besinnt, der Furcht davor hat, sich zu besinnen.)<sup>16</sup>

「熟考すること」を恐れつつ、「拷問」のような緊張感を伴って「終末」にたどり着くことを自ら望む西洋文化は、一種の精神衰弱の様相を呈するかのようだ。その破滅への衝動を歯止め利かない「奔流」に喩えている点は、後にフロイトが提唱した、死への欲動の概念も

14 a. a. O., S. 808.

15 a. a. O., S. 862.

16 Nietzsche: *Aus dem Nachlass der Achtzigerjahre*, S. 634.

彷彿とさせる。自己否定と誇大妄想を繰り返す西洋文化の病いと破滅への願望、そして依然として獣性を克服できないばかりか、攻撃欲動を強化していく人間像の分析は、哲学者ニーチェから、精神分析医フロイトへと引き継がれていく。

#### 4. フロイト ——偽善の文化

1914年に第一次世界大戦が勃発した翌年、フロイトは「戦争と死に関する時評」(*Zeitgemäßes über Krieg und Tod* 1915)の冒頭で、開戦を嘆きつつ以下のように書き出す。

かつて [...] こんなにも多くの明晰な知識人たちを混乱させて、その水準をこれほど徹底的に貶めた事件はなかったのではないだろうか。学者たちでさえ、冷静な公平さを失ってしまった。彼らはきわめて激しい怒りに突き動かされて、敵と戦うための武器として学問を利用しようとしている。人類学者は自分たちの敵をよりにもよって劣等かつ退化していると解釈し、精神医学者は敵たちを精神障害や心的な障害者と診断告知するありさまだ。(Es will uns scheinen, als hätte noch niemals ein Ereignis [...] so viele der klarsten Intelligenzen verwirrt, so gründlich das Hohe erniedrigt. Selbst die Wissenschaft hat ihre leidenschaftslose Unparteilichkeit verloren; ihre aufs tiefste erbitterten Diener suchen ihr Waffen zu entnehmen, um einen Beitrag zur Bekämpfung des Feindes zu leisten. Der Anthropologe muß den Gegner für minderwertig und degeneriert erklären, der Psychiater die Diagnose seiner Geistes- oder Seelenstörung verkünden)<sup>17</sup>.

文化の粹である学問が、客観性を失って自民族主義に傾き始めているというフロイトの嘆きには、狂気のナショナリズムへと陥っていく時代への不安が込められていると同時に、ニーチェ同様、自らを中心として他者を劣等、かつ退化したものとみなす姿勢への批判と読むことができる。フロイトは、当時の西洋人が以下のように信じていたと述べている。「原始的な民族と文明化された民族との間の戦争、肌の色によって区別される人種間の戦争ならば、準備が整っていた。」(Man war also darauf vorbereitet, daß Kriege zwischen den primitiven und den zivilisierten Völkern, zwischen den Menschenrassen, die durch die Hautfarbe voneinander geschieden werden [...])<sup>18</sup>しかし、第一次世界大戦がほかでもない文明国間での科学兵器を用いた殺し合いであることが、ヨーロッパの道徳観の皮相さを暴露する結果となったとして、

17 Freud: *Zeitgemäßes über Krieg und Tod*, in: *Gesammelte Werke in 17 Bänden*. Hrsg. von Anna Freud. 3. Aufl. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1991, 10. Band. [1. Aufl. :1946], S. 324.

18 a. a. O., S. 325.

フロイトはさらに続ける。

[...] 人類の導き手としての使命を与えられて、世界的な利害関係に携わってきたことで知られる、世界を支配する偉大なる白色人種の国家とその国民によって、彼らは互いの不和や利害をめぐる紛争を戦争とは別の方法で決着させることができると期待されていた。彼らの生み出すものは自然の支配における技術的な進歩、芸術や科学といった文化的価値のあるものであったからだ。(Von den großen weltbeherrschenden Nationen weißer Rasse, denen die Führung des Menschengeschlechtes zugefallen ist, die man mit der Pflege weltumspannender Interessen beschäftigt wußte, deren Schöpfungen die technischen Fortschritte in der Beherrschung der Natur wie die künstlerischen und wissenschaftlichen Kulturwerte sind, von diesen Völkern hatte man erwartet, daß sie es verstehen würden, Mißheiligkeiten und Interessenkonflikte auf anderem Wege zum Austrage zu bringen.)<sup>19</sup>

この言葉は、文明の進歩とは、倫理観や道徳の洗練といった文化的な進歩と直接的には繋がらないということを暗に示している。また、むしろ発展する文明の中で退化する人類、という冒頭のアドルノの引用や、ニーチェによる、時の経過に反して退歩していく人間像の警告にも通底する洞察を読み取ることができるのではないだろうか。文化への幻滅に対し、フロイト自身は同論文で、そもそもヨーロッパが高い徳を備えていたと想定することや、20世紀において、はじめてそれが失われたと悼むこと自体が幻想であって、開戦を嘆くには値しないと述べている。続けてフロイトは、当時の西洋文化に対して、文化の要求を、さも完遂しているかのように装うという偽善の文化だと評する。「われわれの現在の文化が、途方もない範囲でこの種の偽善の養成を促進していることは否定できない。文化はそのような偽善の上に成り立つとすら [...] 主張できるかもしれない。したがって、文化的な偽善者が、本当に文化的な人間よりも多数存在する。[...]」(Es ist unleugbar, daß unsere gegenwärtige Kultur die Ausbildung dieser Art von Heuchelei in außerordentlichem Umfange begünstigt. Man könnte die Behauptung wagen, sie sei auf solcher Heuchelei aufgebaut [...]. Es gibt also ungleich mehr Kulturheuchler als wirklich kulturelle Menschen, [...].)<sup>20</sup>

さらにフロイトは人間の本性について、同論文の中で以下のように表現する。「汝殺すなかれの文言は、われわれが殺人者の無限に長き世代系列の子孫であることを確信させる。殺人者たちの殺人欲は、もしかするといまだにわれわれ自身の血の中に流れているかもしれない。」(Du sollst nicht töten, macht uns sicher, daß wir von einer unendlich langen Generationsreihe von

19 a. a. O., S. 325f.

20 a. a. O., S. 336.

Mördern abstammen, denen die Mordlust, wie vielleicht noch uns selbst, im Blute lag.)<sup>21</sup>また、論文の別の箇所ではこう述べる。「無意識の願望の動きから判断すると、われわれもまた原始人と同様、殺人者の集団なのだ。」(So sind wir auch selbst, wenn man uns nach unseren unbewußten Wunschregungen beurteilt, wie die Urmenschen eine Rotte von Mördern.)<sup>22</sup>ニーチェは文明化される以前の人間を、〈人間〉獣という言葉で表現した。彼はこの言葉で、人間が20世紀を目前にしても獣性を克服できていないと指摘した。フロイトは、それを殺人者たちの子孫と呼び、殺人欲に満ちた「原始人」(die Urmenschen)と評する。「原始人」という表象は、〈人間〉獣という表象と同様に、太古への先祖返りという退化のイメージで捉えることが可能である。

戦争とは、発展した文明が、自らのさらなる進歩のために避けがたく引き寄せる、いわば進歩の宿命の一側面であるとも表現できるのかもしれない。その究極的な進歩の局面の中で、偽善者たる原始人としての人類はどうなるかという、フロイトを引用する。「それ [= 戦争] は、後に被せられた文化的な層をわれわれから剥ぎとり、われわれの内なる原始人を再び出現させる。」(Er [=Krieg] streift uns die späteren Kulturauflagerungen ab und läßt den Urmenschen in uns wieder zum Vorschein kommen.)<sup>23</sup>さらなる進歩を志向する戦争の中で、原始人として疎外されて、同族殺しを余儀なくされる20世紀の人類の像は、ニーチェの〈人間〉獣の本性に関する洞察と重なる。

さらにフロイトは同論文の中で戦争廃絶はあきらめるしかないと結論づけている。抑圧するよりも現状を受け入れるとどうなるか、フロイトは以下のように結論を下す。「それ [= 戦争と人類の野蛮さを受け入れること] はより高貴な功績ではないかもしれない。むしろ多くの点において後退であり、退行である。しかし、それには [...] 人生を再び耐えやすいものにするという利点がある」。(Es scheint das keine Höherleistung zu sein, eher ein Rückschritt in manchen Stücken, eine Regression, aber es hat den Vorteil, [...] uns das Leben wieder erträglicher zu machen.)<sup>24</sup>

偽善の文化の担い手となることを余儀なくされた挙句、自己の矛盾を突き詰めて神経症的になるよりは、原始人としての獣性を受け入れ、退行した者になったほうがましだということが、1915年の時点のフロイトの人間観である。ここまでニーチェとフロイトの文化と人間にまつわる言説を俯瞰したところ、両者の洞察に共通する以下の3点が確認される。19世紀後半から第一次世界大戦に至るまでの西洋文化が偽善という病理を孕んでいたという点、進歩する文明に対し、道徳や倫理観などの文化的なレベルが退行していたという指摘、そして当時の人間が本性として、〈人間〉獣や原始人とも重ねられる獣性を克服できずにいたという点である。二人

21 a. a. O., S. 350.

22 a. a. O., S. 351.

23 a. a. O., S. 354.

24 Ebd.

の洞察を踏まえて、第一次世界大戦を目前にしたカフカが、どのように文化と人間を描き出したのか、また、ニーチェとフロイトの洞察との共通項は見出しうるのか、以下に論じる。

## 5. カフカ ——文化への抵抗

ある朝不穏な夢から目を覚ますと、平凡なサラリーマンに過ぎなかったグレゴール・ザムザは自分が一匹の巨大な害虫に変身していることに気が付いた、と物語は始まる。ありふれた中産階級の家を舞台に、結末部分を除きひたすら家族内の出来事を描写する『変身』からは、文学を通じて社会批判しようとする態度はともすれば読み取れないように思われるかもしれない。しかし実際は、カフカは個人的な作家としての側面と同時に、文学を通じた文化批判者の面も持ち合わせていたとはいえないか。

このことは Schmitz-Emans によっても以下のように指摘されている。「カフカの読み物は、狭義の文学テキストのみに制限されてはならず、また文学テキストだけが作家自身の創作活動に影響を及ぼしたわけでもない。彼はダーウィンやヘッケルのような自然科学者も読んでいたし、とりわけ様々な哲学者の著作も持っていた。(その中にはプラトン、フィヒテ、[...] ニーチェが挙げられる)」(Kafkas Lektüren beschränken sich nicht auf im engeren Sinne literarische Texte, und nicht nur diese wirken auf seine eigenen Arbeiten ein. Er liest Naturwissenschaftler wie Darwin, und Haeckel und besitzt insbesondere die Werke diverser Philosophen (darunter Platon, Fichte, [...] Nietzsche).)<sup>25</sup> 『変身』を、ニーチェの哲学やフロイトの精神分析、また両者の文化批判的な文脈と並べて読むことは、きわめて突飛であるともいいがたいのではないか。『変身』では、文化的単位のリミナルな形ともいえる家庭という枠組みの中で、主人公ザムザが虫になるという物語である。自然の中ではなく、他ならぬ人間の文化圏において変身が起こったことが、ザムザにとっても、彼の面倒をみなくてはならない家族にとっても不幸の始まりとというだろう。

虫へと変身した理由に関して、テキストでは触れられてはいないが、近代人の美徳である生産と勤勉のサイクルから逸脱するという事態は、どのような理由で変身が起こったにせよ、文化に対して抗う素振りを受け取ることができる。この文化に対する反抗により、家庭内の秘密、つまりザムザに隠していた資産があったことや、彼以外の家族は働けないかのような素振りを演じていたことなどが暴露されていく。身体的に人間から人間外へと退化するザムザという異分子を、家族という小型の文化単位に据えることで、自分たちの文化規定にそぐわない異分子に対し、ごく平均的な西洋人がいかに振舞うかをカフカは描き出す。つまり、『変身』には二重の文化への反抗が込められているといえる。第一に、ザムザの変身そのもの

25 Schmitz-Emans, S. 285.

という、作品内での主人公による文化への反抗である。第二に、その抵抗に対して冷酷に対峙する人間を描くという、作家による執筆を通じた文化への反抗である。

興味深いことは、真面目なサラリーマンから無益なノンヒューマンへと身体的に退行するザムザ自身よりも、彼を取り巻く両親と妹の方が、異分子への情け容赦のなさという点で、物語の進行にあわせて獣性を開示する点である。退化する近代人、ニーチェの〈人間〉獣や、フロイトの原始人という暴力的な表象は、身体的にはザムザに当てはまるが、心的な傾向としてはザムザ以外の家族によりふさわしい。虫になった息子を追い払うためにリングを投げつける父親や、「それ」という代名詞で呼ぶことで彼の尊厳を否定する妹は、物語の進行にあわせて、ザムザへの排斥感情を強化していく。彼らは異分子へ自分たちが攻撃欲動を抱いていることを自覚しており、それに対して時折決まりの悪さを感じている様子が描かれるが、その相克からは、作家の洞察した近代人の偽善性を色濃く読み取ることが可能である。家族たちは結局ザムザが死ぬまで、彼に対する本当の理解と同情を示さなかったことから、カフカが描き出すごく普通のヨーロッパ人像が、ニーチェやフロイトの指摘した「殺人者の子孫」の影を帯びているといえる。

ザムザ自身は文化に抵抗を試みる分子として描かれているが、しかしそれも家族という文化システムを生命線として、それに縋りながらの抵抗にすぎず、根本的な批判には結びつかずに挫折する。そもそもザムザは虫に変身することで、脱文化ともいえる独自の存在領域を身体的には確保することに一旦は成功しているのだが、精神的には依然、サラリーマンのままであることが物語からうかがえる。虫への変身という事態がなぜ起こったのか、その理由を突き詰めることなく、ましてや自分以外の存在に原因づけることもなく、ただ無益になってしまった自分を責めるというザムザの心の在り方は、現状にただ苦しみ続けることしか術がない、自らの意思で抵抗する力を持たない、という点において家族とはまた違った形の偽善の表れでもあるといえる。身体的には文化から逃げながらも、精神的には文化の恩寵、すなわち家族からの愛情を求め続けるザムザの姿勢によって、せっかくの文化への抵抗が単なるポーズと自己否定という結末に終わる。

一人息子のザムザを死へと追い込んだ後、家族は久々に晴れ晴れとした気持ちになって、郊外へと遊びに行く。変身の結末の文章を引用する。「電車が目的地に着いて、娘が一番に立ち上がり、若い体を伸ばした時、彼ら（＝両親）にはそれが自分たちの新しい夢と善き意図の証明であるかのようだった。」（Und es war ihnen [=Eltern] wie eine Bestätigung ihrer neuen Träume und guten Absichten, als am Ziele ihrer Fahrt die Tochter als erste sich erhob und ihren jungen Körper dehnte.）<sup>26</sup>テキスト内のザムザの死までの暗さと、結末部での晴れやか

26 Kafka: *Die Verwandlung*, in: *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Wolf Kittler und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main (S. Fischer) 2002, S. 200.

さ、また原文テキストの最後の名詞でもある妹の健康な「若い体」と、干からびて死ぬザムザの退化した身体という対比には、ザムザ一家の二面性が読み取られると同時に、近代西洋文化の二面性を象徴する。家族は文化的生活を営みながらも、＜人間＞獣の本性を、異分子と化した家族の一員へと向けるという偽善、そしてザムザ自身は近代人の精神における野蛮な先祖返りを文字通り体现することで、周りの偽りを批判しながらも、異分子として生きるという意思を保つことができないという偽善である。この2つの偽善が、20世紀の文化と人間の根本的な病いとして、『変身』の中には描かれている。

ニーチェとフロイトは、20世紀の文化と人間は、暗い奔流の中に突き進んでいく宿命にあると洞察した。作家カフカも『変身』の結末をもって、異分子として生きることの時代的な不可能性や、偏狭に陥った極端な人間中心主義の暴力を読者に提示する。本論文では、ザムザの死という結末を、家族と彼自身による偽善の結果だと論じたが、フロイトの主張したように、現状に足搔いて抵抗するよりも、自ら判断をやめて、偽善の文化の担い手になるほうが人生は堪えやすいという主張を暗に裏付ける結末であるともいえる。

『変身』は、虫に退化するという皮肉を通じた、20世紀の精神の退行に対するカリカチュアとして読むことが可能である。本論文では『変身』のみを取り上げたが、カフカの執筆を貫く時代への抵抗の精神は、偽善という病いに陥った文化と、＜人間＞獣、原始人という表象で人間の獣性を批判したニーチェとフロイトの近代文化および人間批判の系譜へと据えることが可能なのではないだろうか。彼ら3人の共通項とは、当時の倫理観、道徳感情、すなわち人類の文化的な精神段階に対する強い疑いと、時代のエゴイズムの醜悪さを徹底的に暴露しようとする意志にある。

Summery

## Die Krankheit in der Kultur und das Getier »Mensch«

—Nietzsche, Freud und Kafka

Ryo Yamao

Ein Denker, Friedrich Nietzsche, ein Psychoanalytiker, Sigmund Freud und ein Autor, Franz Kafka haben zur fast selben Zeit (vom Ende des 19. Jahrhunderts bis zu den Anfängen des Ersten und Zweiten Weltkriegs) gelebt, in der die Menschheit ihre ganze Bestialität und Grausamkeit offenbart hat. Wie haben Nietzsche, Freud und Kafka die Menschen in ihrer Zeit analysiert, und wie haben sie diese krankhaften Auswüchse der damaligen europäischen Kultur gesehen? Der vorliegende Aufsatz untersucht ihre Diskurse über die Menschen und Kultur, um diese Frage zu beantworten, und versucht Nietzsche, Freud und Kafka als Kulturkritiker in einen möglichen Zusammenhang zu bringen.

Nietzsche deutet an, dass die »Menschheit« in seiner Zeit im Gegensatz zum technologischen Fortschritt tatsächlich einen Rückschritt gemacht hat. Er sagt: es sei nur eine Illusion, dass die Menschheit mit der Zeit raffinierter wird. Seine Einsicht lässt sich als Widerspruch gegen Sozialdarwinismus und Extremhumanismus sehen. Er denkt, dass die europäische Kultur und die Menschen am Ende des 19. Jahrhunderts verdorben sind. Nietzsche nennt die Menschen, die die eigene Bestialität und Grausamkeit nicht überwinden können, das Getier »Mensch«.

In den Aufsätzen Freuds kann man ähnliche Einsichten bzgl. der »Menschheit« und des kulturellen Niedergangs im Europa des 20. Jahrhunderts finden. Er glaubt nicht, dass die Menschen in seiner Zeit eine höhere Moral als früher besitzen. Und er sagt, dass es mehr „Kulturheuchler“ als echte kulturell hochstehende Menschen gibt, und die Menschen im 20. Jahrhundert ihre Mordlust hinter dem Fortschritt der Technologie verstecken und sie damit verstärken, wie „die Urmenschen“.

In *der Verwandlung* von Kafka kann man einen doppelsinnigen Widerstand gegen die damalige Kultur finden, nämlich den Widerstand der Hauptfigur Gregor Samsa gegen die Kultur durch seine körperliche Verwandlung im Text und den Widerstand, der sich im Schreiben

des Autors selbst ausdrückt, wenn er beschreibt, wie grausam Gregors Familie gegen dessen Widerstand vorgeht. Gregors Familie deckt dadurch ihr eigentliches Wesen als „das Getier »Mensch«“ und als „Kulturheuchler“ auf. Und Gregor Samsa selbst ist auch ein „Kulturheuchler“, weil er im „Kreise von Menschen“ bleiben möchte und als das Fremde nicht überleben will.

Nach der Untersuchung dieser Diskurse sind folgende 3 Zusammenhänge ihrer Kulturkritik klar geworden; die kulturelle Neigung der Heuchelei, der Rückschritt der „Menschheit“ und die unbezwingbare Aggressivität der Menschen, die sie zu Tieren werden lässt.